

養老七年癸亥の夏五月、吉野の離宮に幸す時

に、笠朝臣金村の作る歌一首 并せて短歌

九〇七番

滝の上の 三船の山に みづ枝さし しじに生ひ  
たる とがの木の いや継ぎ継ぎに 万代にか  
くし知らさむ み吉野の 秋津の宮は 神からか  
貴くあるらむ 国からか 見が欲しからむ 山川  
を 清みさやけみ うべし神代ゆ 定めけらしも

反歌二首

九〇八番

年のはに かくも見てしか み吉野の 清き河内  
の 激つ白波

九〇九番

山高み 白木綿花に 落ち激つ 滝の河内は 見  
れど飽かぬかも